

『親鸞聖人に聴く』より抜粋

4 6、十劫じゅうこくの昔むかしに助たすかっているのでしょうか。

△阿弥陀あみださまは十劫じゅうこくのむかしに、衆生往生しゅじょうおうじょうせずは正覚しょうがくを取とらないと誓ちかわれた願がんに報むくうて、正覚しょうがくを成就じょうじゆされたのですから、私わたしの往生おうじょうは決きまっていますのですか。

○衆生往生しゅじょうおうじょうせずは正覚しょうがくを取とらないと誓ちかわれた因願いんがん酬報しゅうほうの仏ほとけさまですから、衆生しゅじょうの往生おうじょうは決けつじょう定ていであります。

△それなら私わたしは、十劫じゅうこくのむかしに助たすかっていることを知しらなんだ、だけですでに助たすかっているのですか。

○助たすかっていたのなら、今いままで迷まよいを重かさねて流転るてんしているはずがありません。助たすかっていたのではありません、助たすかるわけが成就じょうじゆしたのであります。十劫じゅうこくのむかしに助たすかっていること

を知らなんだと有頂天うちようてんになっている人を、十劫秘事じゅうひじの異安心いあんじんというのです。助かるわけが成就じょうじゆしてありながら、各自かくじは他力たうきを噂話うわさばなしに聞きいているだけで実地じつちの求道きゅうどうがないから、一体いつたいになっすくていないから救われてはいすくないのです。これは法体成就ほうたいじょうじゆの機法きほう一体いつたいを学問がくもんで承知しょうちしながら、信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いつたいを諦得たいとくしてきゅうさいいないから、救済きゅうさいされた人ひとがいないのです。

法体成就ほうたいじょうじゆの機法きほう一体いつたいとは、法ほうのお手元てもとは、南無なむは機きの方かた、阿弥陀仏あみだぶつは法ほうの方かた、阿弥陀仏あみだぶつに南無なむした人ひとは助かるたすに間違まちがいないと、十劫じゅうのむかしに正覚しょうがくを成就じょうじゆされたのは証明しょうめいであつて、どんな難化なんけの衆生しゆじようでも、どんな難治なんちの庶類しよるいでも、信しんずれば必かならず撰取せんしゆするといちかう誓じようじゆいが成就じょうじゆしたのです。法蔵菩薩ほうぞうぼさつが今いまからそろそろ正覚しょうがくを成就じょうじゆされたのでは、私わたしはどこまで流転るてんするかわからないから、正覚しょうがくを成就じょうじゆしてくだいて下さるから安心あんしんして、たのめる、まかせる、信しんずることができるのです。正覚しょうがくを成就じょうじゆしたといはかせうことは博士はかせになつたということで、どんな頑固がんこの病氣びやうきでも、私わたしにかかつたら必かならず全治ぜんちして見みせるという腕前うでまえができたということであつて、あ

あなたの病氣びようきが全治ぜんちしたというのではありません。あなたはまだ病氣びようきが出ていないのだから、正覺しょうかくを取った博士はかせが承知しょうちしただけで、まだ素直すなおな健康体けんこうたいだから診察しんさつを受けてはいないのです。

信念冥合しんねんめいごうの機法きほう一体いつたいとは、調熟ちようじゆくの光明こうみように照てらされて、三毒五欲さんどくごよくの煩惱ぼんのうが見えだし、このもお助けたす、死しんだらお助けたすと近所きんじよの藪医者やぶいしやで養生ようじようしていたが、癌がんと名のつく病やまいとなれば、名医めいいいを探さがして財産ざいさんを傾かたむけても治療ちりように専念せんねんするようになり、寢食しんしょくを忘わすれて、十余じゅうよヶ国こくの境さかいを越こえてでも求道きゆうどうするようになるのです。

遂ついに発見はっけんされたのが、阿弥陀あみださまから唯除五逆ゆいじよごぎやくひぼう誹謗さいごと匙なを投げられた逆謗ぎやくほうの逆見さかごです。絶体絶命ぜったいぜつめいの境地きようちに立たったとき、三定死さんじようしの境地きようちに立たって往生おうじようの望みのぞの絶えたたとき、自力じりきが捨すたるのです。そのとき名医めいいいが顕あらわれて「私が医者わたくし いしやになろうという願がんを立て、あらゆる苦勞くろうして、どんな難治なんちの逆謗ぎやくほうでも全治ぜんちして見みせるといふ腕前うでまえができてこのかた十年ねん、もしその病やまいを

全治^{ぜんち}することが不可能^{ふかのう}であつたら博士^{はかせ}を捨^すてる」と手術^{しゅじゅつ}にかかり、逆謗^{ぎやくほう}の逆児^{さかご}を引き出^{ひだ}して下^{くだ}さつたとき、オギヤーといったときが、親^{おや}が産^うんだとき、子供^{こども}が生^うまれたとき、博士^{はかせ}の腕^{うで}が顕^{あら}われたときは同時^{どうじ}であつて、衆生^{しゅじょう}の往生^{おうじょう}と仏^{ほとけ}の正覚^{しょうがく}は同時^{どうじ}に決^きまつたのが、信念^{しんねん}冥合^{めいごう}の機法^{きほう}一^{いつ}体が成就^{じょうじゆ}したのです。

法体^{ほうたい}成就^{じょうじゆ}の機法^{きほう}一^{いつ}体は十劫^{じゅう}のむかし、信念^{しんねん}冥合^{めいごう}の機法^{きほう}一^{いつ}体は一^{いち}念^{ねん}の信^{しん}、十劫^{じゅう}の劫^{こう}と一^{いち}念^{ねん}の念^{ねん}と、これを念劫融即^{ねんこうゆうそく}と言^いつて、十劫^{じゅう}のむかしの正覚^{しょうがく}の腕前^{うでまえ}が一^{いち}念^{ねん}の信^{しん}の開発^{かいほつ}で顕^{あらわ}れたのです。

だからこの一^{いち}念^{ねん}の信^{しん}一^{いつ}つで、無量^{むりやう}永劫^{えいこう}の解決^{かいけつ}がつくから、唯信^{ゆいしん}独達^{どくたつ}の法門^{ほうもん}と言^いつたのです。